

要望書

2005年 8月 7日

新潟地方裁判所 高田支部 御中

東京大学海洋研究所教授

木暮一裕 

今般、上越市の北陸研究センターにおいて、ディフェンシン遺伝子導入イネの野外実験が実施されていると聞きました。

ディフェンシンは、動植物に共通して存在する抗菌タンパク質で、動植物が病原菌から身を守るための重要な物質です。ディフェンシンは、必要なときにだけ必要な場所で作られるので、自然状態での耐性菌出現はほとんどないと思われますが、実験室内で、植物ディフェンシンを加えて、酵母やカビを数日間培養すると耐性菌が得られたという論文が出ています。

病原菌がディフェンシン耐性を獲得すると、強大な感染力を発揮することが予想されます。したがって、ディフェンシンの乱用は厳に慎むべきものと思います。この点、北陸研究センターが野外実験を行なっている組換えイネは、カラシナのディフェンシン遺伝子を組み込んだもので、イネ由来葉緑組織特異的プロモーターで発現調節されていて、茎や葉で常時ディフェンシンを生産するようになっています。ディフェンシンが分泌性のタンパク質であり、またイネが水をはった水田で栽培されることを考えると、茎で生産されたディフェンシンが茎から分泌して、水田全体へ拡散していくと考えられます。こうなると、水田全体が巨大な耐性菌培養装置になってしまっていますが、こうした耐性菌の危険性に対し、北陸研究センターが万全の配慮をしているという情報を聞きません。

抗菌性物質は、抗生物質耐性菌が大きな問題となりつつあるように、注意深く使わないと極めて深刻な事態を招きます。最悪のシナリオは、これで耐性を得た細菌が環境あるいは地球上に広く蔓延し、これまでの病原菌の病原性を飛躍的に高めた細菌が多くの人間を死に至らしめる、というものです。今回の裁判はこのSFのようなシナリオを可能にしかねない危険性をはらんでいます。

北陸研究センターの野外実験において、耐性菌の流出予防に万全を期すように要求します。もし、そのような万全の措置が取られていない場合には、貴裁判所におかれまして、即時に、そのような危険な実験の中止を命じられるように要望いたします。

以上